プログラム・ノート

西原 稔

1886年、ヨハネス・ブラームス(1833～97)は夏の期間をスイスのベルン州にあるトゥーン湖畔で過ごした。このトゥーン湖畔では「緑色のよろい戸のある茶色の家」の一階の全室を借り、創作活動に専念した。そしてこの年、今回演奏される3曲や5つの歌曲 作品105などがこの地で完成されている。これらの作品は主題や動機の点で相互に密接な結びつきを持っているのが特徴である。ブラームスでは以前から4度音程や2度音程の使用が多いが、この時期の作品ではこの2つの音程を組み合わせて用いられている。本公演の3曲から、壮年期ブラームスの特徴を聴き取っていただけるだろう。

20代を過ごしたハンブルクにおいて、ブラームスは同地のバウムガルテン・ウント・ハインス社のピアノを非常に気に入り、使用していた。その後、彼はクララ・シューマン(1819～96)から、シューマン夫妻の結婚に際して寄贈されたコンラート・グラーフを譲り受ける。また早くからエラールのピアノに注目し、ピアノ協奏曲第1番 作品15の演奏ではしばしばエラールを用いている。彼がこのピアノに魅せられていたのはクララ・シューマン宛の「美しい音のエラールのピアノ」という言葉にも示されている。彼がウィーン時代に自宅で使用したのはシュトライヒャーのピアノで、このピアノによって後期の小品が生みだされている。

チェロ・ソナタ第2番 ヘ長調 作品99

このソナタはヨアヒム四重奏団のチェロ奏者ロベルト・ハウスマン(1852～1909)と密接に結びついている。初演は、1886年11月24日、ウィーンにて、ハウスマンのチェロ、ブラームスのピアノによって行われた。

第1楽章　ヘ長調、4分の3拍子。ピアノの波打つトレモロをともなってチェロが雄大な第1主題を歌いだす。第1主題の動機は完全4度上行と短2度の下行の音程から成る。続いてド-ファ-ラ-レから始まる旋律(ドとファ、ラとレが4度音程)が登場するが、この動機は同時期に作曲されたヴァイオリン・ソナタ第2番や翌年に完成したヴァイオリンとチェロの二重協奏曲にも用いられている。

第2楽章　嬰ヘ長調、4分の2拍子。第1楽章の主調に対して半音高い嬰ヘ長調で始まる。チェロのピッツィカートとピアノの右手の演奏は対話を思わせる。中間部はヘ短調である。最後は、彼の後期の作品でしばしば用いられる昇天するかのような上行分散和音で締めくくられる。

第3楽章　ヘ短調、8分の6拍子。ピアノの下行動機の主題で始まり、その後チェロが加わる。第1部ではレガートとスタッカートが巧妙に対比され、絶妙な表現のコントラストを生みだしている。

第４楽章　ヘ長調、2分の2拍子、ロンド形式。チェロの旋律は開放されたかのような自然な音調で、歌謡性に富んでいる。ロンド主題の回帰に際しては特にピアノでは変奏が施され、表現の多様性が図られている。

ヴァイオリン・ソナタ第2番 イ長調 作品100

このソナタは、しばしば訪れた友人の詩人、ヴィトマンの私邸で私的に初演された後、1886年12月2日、ウィーンにて、ヨーゼフ・ヘルメスベルガー(1828～93)のヴァイオリン、ブラームスのピアノで公開の初演が行われた。

第１楽章　イ長調、4分の3拍子。叙情的で至福感にあふれた楽章である。この楽章の主題で注目されるのは上に述べた「4度音程」の表現に加えて、ヴァイオリンとピアノの対話で、主題の最初の4小節をピアノが奏すると第5小節でヴァイオリンがそれに応える。「テネラメンテ(柔和に)」からが第2主題である。伸びやかな楽想の主題で、その楽想は5つの歌曲 作品105の第1曲との類似性が注目されている。

第２楽章　ヘ長調、4分の2拍子。緩急の対比が特徴的。主要主題の部分でも上記の4度音程の効果的な用法が注目される。

第３楽章　イ長調、2分の2拍子。ヴァイオリンがゆったりと強い憧れを込めた動機を提示する。この楽章で登場する3度の動機は、上記の歌曲集の第2曲の表現を思わせ、その後、下から湧き上がるピアノの分散和音の動機と対照をなしている。

ピアノ三重奏曲第3番 ハ短調 作品101

この作品は交響曲を想わせる壮大な楽想で、作品はヴィトマンの自宅で私的に演奏されたのち、1886年12月20日、ブダペストにて、イェネー・フバイ(1858～1937)のヴァイオリン、ダーヴィト・ポッパー(1843～1913)のチェロ、作曲者のピアノにより公開初演された。

第１楽章　ハ短調、4分の3拍子。力強い楽章で、冒頭の主題がきわめて入念に労作されている。

第２楽章　ハ短調、2分の2拍子。きわめて急速な楽章で、弦楽器は弱音器をつけて奏され、駆け抜ける影のように静かに楽章が閉じられる。

第３楽章　ハ長調。ゆったりとした主部は4分の3拍子と4分の2拍子が交代で用いられ、中間部分のクワジ・アニマートの部分では8分の9拍子と8分の6拍子の混合拍子になる。この拍子の交代は自然で、音楽に内面からの躍動感を与えている。

第４楽章　ハ短調、8分の6拍子。ヴァイオリンの弱音の3音からなる主題動機が骨格となり、楽章が見事に組み立てられている。

（にしはら みのる・音楽学）